

## 第2回 深作欣二という名の《王道》～その2

80年代、時代劇はテレビを中心にこぢんまりとした箱庭的世界ばかり描かれることになる。それにより人情や江戸情緒、時代考証がクローズアップされる一方で、かつての時代劇にはあった、作り手たちが思うままに創造の羽根をのばすことのできる自由さは失われ、作者にとっても、観る者にとっても、どこか堅苦しいものになっていった。

そこで深作は、かつて観客を熱狂させ、そしていつの間にか忘れ去られた時代劇のジャンルを現在に復興させることで、失われた「時代劇の自由なロマン」を取り戻そうとする。

後編となる今回は、そんな深作の想いが強く伝わる三本を紹介していく。

■『魔界転生』（映画／1981年／東映＝角川映画／原作・山田風太郎／脚本・野上龍雄、石川孝人、深作欣二／出演：沢田研二、千葉真一、真田広之、緒形拳、若山富三郎ほか）

幕府によって滅ぼされたキリシタン・天草四郎（沢田研二）が魔界の力で蘇り、その揚力をもって並み居る武芸者たちを籠絡。世の中を混沌に陥れ、幕府への復讐を果さんとす。それに対するは、妖刀・村正を手にした若き剣豪・柳生十兵衛（千葉真一）。

本作で深作は、当時の時代劇で軽視されつつあった《剣の迫力＝チャンバラの魅力》を追及している。

チャンバラの魅力といえばなんといっても、刀と刀による、互いの命を賭けたギリギリの緊張感にある。中でもその真骨頂といえるのが、剣豪同士が真っ向からぶつかり合う一騎打ちだ。その演出の構造は言わばプロレスと同じ。さまざまな劇的な効果を駆使して観客を煽り、そしてフィクションでありながら真剣勝負以上の迫力をもって観客を引き付けることにある。具体的には、大きく分けて以下の4点だ。

### 1. 対戦カードの期待感

（役者・役柄の名前のもたらず、「どんな戦い？」「どっちが勝つ？」と空想する楽しみ）

### 2. 戦う前の緊張・高揚感

（煽りの演出＝対峙し、ジリジリと間合いを詰める両雄。その間で交わされるドラマ）

### 3. 舞台装置の効果

（夕陽、スモーク、雨、雪、炎、廃墟、海辺……など、決闘の舞台を工夫することで得られるドラマチックな盛り上がり）

### 4. 間合い、斬り合いの迫力

（どちらかが生き残り、どちらかが死ぬ、文字通り「必死」の戦い。その果てにある「完全決着」というドラマ性）

この4点を深作は一騎打ちシーンの中で徹底させ、趣向を凝らした決闘を展開させてい

った。特に物語終盤、十兵衛の前には次々と圧倒的な強敵が現れ、観客を煽りに煽っていく。

まずは《天下一の剣豪》宮本武蔵。「十兵衛 vs. 武蔵」これだけでも大興奮のカードだが、その上、武蔵を演じるのは名優・緒形拳だ。両者の距離が近づくとつれ、その戦いへの期待は当然のごとく高まっていく。そして両者の決闘は巖流島よろしく、見晴らしのよい海岸で繰り広げられる。波や岩を利用しながら、壮絶に斬り合う十兵衛と武蔵。そして、一瞬の隙をついた十兵衛が、木刀もろとも武蔵を斬り伏せる。

このシーンを演出するに臨んで深作は、他のシーンの撮影が終わって宿に帰った後で毎晩のように殺陣師の菅原俊夫を呼んで、深作は二刀流、菅原は一刀流の定規をもってチャンバラごっこを展開。両者で実際に手を合わせながら、立ち回りの手順を練り上げていったという。それだけに、海辺で刀を合わせる十兵衛と武蔵は、そのチャンバラごっこがそのままに反映されているようで、どこか楽しげに見える。

そして、最後に十兵衛を待ち受けるのは、柳生但馬守。演じるのは十年前に映画『子連れ狼』シリーズをヒットさせた《伝説の剣豪スター》若山富三郎だ。但馬守と十兵衛は役柄の上では実の父子だが、殺陣の上では若山は千葉の師匠に当たる。それだけに、剣を突きつけて対峙し合う両者の間には、ただのフィクションではない迫力があつた。

その迫力を生み出すには、深作の用意した凄まじい舞台効果も大きく作用している。

江戸城は天草四郎たちの攻撃により、火に包まれる。そして、炎で燃え盛る天守閣の中が父子の決戦の場となった。

通常の映画撮影では、安全面を考慮して火事のシーンで実際にセットを燃やすことはない。撮影用のバーナーをいくつもセットの裏やカメラ前に配置し、カメラアングルを工夫しながらセット全体が燃えているように見せる。これなら、注意さえしていれば炎がセットに燃え広がることはない。その一方、どうしても本当に燃やすのに比べると炎の勢いは限定的なものになる。

このシーンを撮るにあたり、深作はバーナーでは満足をしなかった。そして、セットを丸々燃やしながらの撮影を敢行したのだ。セットは撮影所のスタジオ屋内に建てられるため、一つ間違えば大参事になりかねない。それでもなお、深作はこのシーンを最高の迫力で撮ることにこだわった。所長以下、撮影所員が総出で消火器を構え、消防車も待機した中で、撮影は行われることになった。

「十兵衛と戦いたい」その妄執に取りつかれた但馬は、ひたすら息子の名前を叫び続ける。BGMが転調すると同時に炎の向こうから現れる十兵衛。観ていて思わず武者震いする入場シーンだ。両者はプロレスよろしく、戦いの前の口上を言い合うのだが、この間にもセットは炎で崩れ落ちていく。そして、合わさる剣と剣。稽古場でも長年に亘り木刀を交えてきた両俳優だけに、スピーディな斬り合いは圧倒的な迫力。しかもそれが、画面一杯に燃え盛る炎をバックに展開されるため、観ていて興奮が止まらない。

そして圧巻は若山。炎の中にあっても決して瞬きすることなく、カッと目を見開き、但馬の妖気と狂気を命賭けで表現してみせている。

深作を筆頭に、さまざまな人間の《チャンバラ愛》がひしひしと伝わってくる一本だ。

■『里見八犬伝』（映画／1983年／角川映画／原作・鎌田敏夫／脚本・鎌田敏夫、深作欣二／出演：薬師丸ひろ子、真田広之、千葉真一、志穂美悦子ほか）

かつて時代劇には《伝奇冒険もの》というジャンルが存在していた。『児雷也』『真田十勇士』『新諸国物語』……、妖術、忍術、秘術を駆使しながらヒーローが魔物と戦う冒険を繰り広げるこれらの作品は、特に当時の子供たちを熱狂させてきた。だが、段々と時代劇がリアル志向に向かうにつれ、いつの間にか消え去ってしまっていた。深作は、その原点である滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』に基いた鎌田敏夫の同名小説を原作に、今度は伝奇モノを蘇らせようとする。

館山城主に殺された武将の妻子（夏木マリ、目黒祐樹）が妖怪となって復活、魔力をもって城を乗っ取ってしまう。城主の一人娘・静姫（薬師丸ひろ子）はなんとか逃げ延びた。そして、姫を守ることを宿命付けられた八人の《犬士》（真田広之、千葉真一ら）が続々と集結。妖怪たちから城を奪還すべく、戦いを挑む。

物語の機軸になるのは、当時の若手人気スターだった薬師丸と真田のラブストーリー。そこに千葉や志穂美悦子らJAC勢によるワイヤーを駆使したアクロバティックな大アクションが散りばめられるという、実に現代的なタッチの伝奇時代劇となっている。

そして深作は、考証や堅苦しいルールは一切取り外し、おどろおどろしくも煌びやかな衣装・メイク・セットによるケレン味の塊の世界を提示。イメージーションを縦横無尽に発揮し、「ファンタジーとしての時代劇」の魅力を存分に見せつけている。

とにかく、犬士たちを待ち受ける城に仕掛けられた罠の数々が楽しい。

地下水路の下から現れる大蛇、狭い地下道を転がり来る岩石、落ちてくる天井、崩れ落ちる巨大な柱……。アミューズメントパークかと思いがうようなカラクリが城の随所に散りばめられていて、犬士たちに次々と襲いかかるのだ。

それはまるで、当時大ヒットしていたハリウッド『インディジョーンズ』シリーズのような《冒険活劇》。単なる《ジャンルの復興》に留まらない、当時の子供たちをワクワクさせるようなロマンに満ち満ちている。

■『阿部一族』（テレビスペシャル／1995年／フジテレビ／原作・森鷗外／脚本・古田求／出演：山崎努、佐藤浩市、真田広之、蟹江敬三、渡辺美佐子ほか）

その後も深作は、時折作る時代劇で観客の度肝を抜いてきた。

自らがかつて第一話を演出して口火を切った「必殺」シリーズの劇場版『必殺4 恨みはらします』では、中村主水（藤田まこと）ら仕事人チームと悪の奉行（真田広之）との大攻防戦を極彩色の映像の中で展開。巨大なスラムのセットを舞台にした忍者アクションや、真田の薙刀を駆使した立ち回りといったド派手な演出で、硬直状況に陥っていたシリーズに活を入れている。

また『忠臣蔵外伝・四谷怪談』では、江戸時代には表裏一体のものとして上演されていた「忠臣蔵」と「四谷怪談」を強引に融合。SFXを駆使して、既に他界している民谷伊右衛門（佐藤浩市）とお岩（高岡早紀）の亡霊が魔力を使って赤穂浪士の討ち入りに協力するという、壮絶なアクションシーンが描かれた。

そして結果的に「最後の時代劇」となったのが、『阿部一族』だ。

文豪・森鷗外の代表作とも言える原作を、深作は大胆にアレンジしている。

前藩主の「殉死を禁じる」との遺言を守ったがために藩内で不忠者と蔑まれる父（山崎努）と、禁を破って父が殉死したために新藩主から疎まれる息子たち（蟹江敬三、佐藤浩市ら）。描かれるのは理不尽に巻き込まれた一族の物語だが、深作の手にかかると趣が異なってくる。

物語の終盤、新藩主とその側近たちから相次ぐ嫌がらせを受けた一族は叛乱を決意、屋敷を要塞化して立て籠もる。深作の狙いは、西部劇映画『アラモ』のような、砦に立て籠もる少数精鋭の味方とそれを取り囲む圧倒的多数の敵との攻防戦を描き、文学的な原作を籠城アクションとしてアレンジすることにあつた。

屋敷に、藩兵たちの大軍が迫る。だが、一族は随所に罠やバリケードを仕掛け、そこから矢や鉄砲を射掛けたり、槍で突いたりして、巧みに応戦。圧倒的な兵力差がありながら互角の攻防戦を展開される。

そして、その結末もまた、壮絶なアクションと共に形作られていく。

かつて映画『赤穂城断絶』で深作は、クライマックスの「吉良邸討ち入り」にて、浪士達そっちのけで千葉真一扮する不破数右衛門と渡瀬恒彦扮する清水一学との一騎打ちを延々と7分間にもわたり映し出した。本作も同様に、佐藤浩市と真田広之と壮絶な一騎打ちが物語を終結させる。

殺陣の技量では佐藤は真田に大きく劣る。そこで深作は、短いカットを重ねることで動きにボロが見えないようにし、これをカバーした。それがかえって功を奏することになり、緊張感あふれるスピーディな立ち回りが映し出されていく。そして両者は屋敷を縦横無尽に駆け回り、血みどろの死闘を展開した。

気が付けば、それが森鷗外原作の文芸作品だということを忘れていた。本作には小難しいところはほとんどない。どこからどう観ても、手に汗握るアクション映画である。

深作は陰惨な悲劇を、大興奮のエンターテイメントへと昇華してのけてみせたのだった。

時代劇とは、本来、伝統文化的な古臭いものではなく、時代に応じて変化する現在進行形のエンターテインメントである。深作欣二は、たえずそのことを意識しながら、我々にいつも「新しい時代劇」の姿を提示してきた。

深作欣二の時代劇を見直すこと。それは、本来あった時代劇の魅力を見直すことなのである。

#### **【DVD 情報】**

『魔界転生』（東映ビデオ）

『里見八犬伝 デジタルリマスター版』（角川書店）

『阿部一族』（松竹ホームビデオ）